愛知教育大学附属高等学校研究紀要第46号
pp.61～67（March, 2019）

裏打から書への興味関心を高める授業

―書周辺の技能体験を通して―

芸術科（書道）　川瀬英幹

生涯にわたり書に親しむ態度を養い、また、書への興味関心を失わせないために、何をすべきかを試行錯誤した結果、表装に注目し、授業に取り入れた報告である。自らが書くのみならず、より深く、興味を持って鑑賞するためには何が必要かを考えるきっかけとして、裏打を通して表装の一部を体験させる授業を行った。生徒は、書いた作品を飾る作品へと仕立てていく達成感を味わうとともに、どのように鑑賞されてきたのか、また、長期間にわたりどのように書が残ってきたのかを実感することができたようだ。

＜キーワード＞　鑑賞　興味関心の喚起　表装　裏打　作品化

1. はじめに

何をしたら、書に対する興味関心を喚起することができるのだろうか。やはり、本物を鑑賞し、その迫力、歴史を実感することであろう。しかし、芸術における「鑑賞」は、本物に対峙することは難しい。百聞は一見に如かずとの言葉通り、本物から受ける印象を体感させたい所だが、見に行くのも、用意するのも難しい。そこで、アプローチを変え、その芸術がどのように保存され、受け継がれてきたのかなどの、周辺的な知識に目を向けることで、実際に美術館などに足を運ぶきっかけを作りたいと考え、今回の授業を計画した。

平成30年3月に公示された高等学校学習指導要領では、改訂の具体的な方向性として「生活や社会の中での文字や書の働き，書の伝統と文化についての理解を深める学習の充実を図る。」とある。また、書道Ⅰで育成を目指す資質・能力を「生活や社会の中の文字や書，書の伝統と文化と幅広く関わる資質・能力」と規定している。

さらに、平成30年7月に示された高等学校学習指導要領解説においては、書道Ⅰの「B（1）鑑賞イ(エ)書の伝統的な鑑賞の方法や形態」の解説の中で、「表装の形式」という点が取り上げられている。「地域の文化財や美術館，博物館などを活用することによって，鑑賞の場，表装の形式を実感的に理解できるようにすることも大切である。」とある。

そこで、授業の中で、紙の保存という点から、また、自らの書を作品として仕立てるという達成感の充足という点から、表装の中でも裏打の技術を体験させようと考えた。その目的や方法を理解することで、作品を完成させたという喜びとともに、今後、本物を鑑賞する機会を得たときに、作品だけでなく、どのように受け継がれ、残されてきたのかという点にも思いを馳せて欲しいと考えたためである。

2. 裏打ちについて

書は、さまざまな形で保存され、受け継がれてきたからこそ、現代に残り、我々が鑑賞する機会を得ている。

紙は水分が加わったり、乾燥したりすることで伸縮する。そのため、文字の部分の水気によって伸

縮が生じ、「しわ」が発生する(写真1)。これを伸ばし、紙を補強するのが裏打である（写真2)。

さらに、裏打したものを、掛軸や和額に仕立てることで、長期間の鑑賞に堪えうるものにしていくのである。

藪田夏秋『増補版　誰れでもできる　裏打のすすめ』では「表装、特に軸は、裏打をくり返し、最低二回、多ければ三～四回裏を打つ。何故かくも多くの裏を打つかと言えば、一に、掛軸をいかにうまく床の間に掛け、又永く保存するかにかかっているためである。脆い紙をいためず、きれいに展示し保存する技術、それが裏打なのである」とある。

写真１

写真２

3. 方法

アイロンを用いた裏打セット等も販売されているが、金銭的にも負担がかかる上、教室で、何台ものアイロンを同時に使用するのは難しい。

また、和紙の特性や墨の特性を理解するには、実際に障子のり等を使用して裏打ちを体験する方が望ましい。水のかけ具合や、のりの濃度、刷毛の扱いなどは回数をこなすことで慣れ、自らの技術の高まりを体感しやすいため、成功体験にもつながりやすい。さらには、自らが書いた文字が、作品に近づいていく様を体感することは、生徒自身の達成感を充実させることとなる。

そこで、障子のりを用いた裏打を３～４人１組となって、各班人数分の作品を裏打させることとした。尚、対象としたのは、書道Ⅱを履修する本校３年生の授業、また、隣接する愛知教育大学の書道史を受講している学生である。人数も少なく、作業を行いやすい状況が整っている点、また、書の保存や修復という話に関連して裏打ちを体験することで、書の歴史に対しての理解が深まると考えた点からである。

4. 本時に関する授業計画

(1) 前後の流れ

全 12 時限を使って、曹全碑の合作を制作する（本校の芸術の授業は２時間続きで実施)。

１時間目　　隷書の筆法の復習、合作について知る

２・３時間目　半紙による担当場所の練習

４～７時間目　半切による練習

８・９時間目　清書

10・11 時間目　裏打【本時】

12 時間目　　パネルへの張り込み

(2) 本時の流れ　(　)内の数字は所要時間(分)

(5)　表具の形式を知る

(5)　裏打ちの技術を知る

(5)　模範を実演

(60) 実践

(20) 道具の片付け

(5)　感想をプリントに記入する

5. 具体的な手順と授業の様子

(1) 手順について

次の手順で作業を行った（以下の手順については、配布した授業プリントにも掲載)。

手順①　机を拭く（汚れが残っていると作品が汚れてしまう)。

②　道具を準備する。作品と裏打ち用の鳥の子紙（丈夫な和紙です）も用意する。

【障子のり　トレー×２（のりを溶く入れ物）　はけ　手ぬぐい　バケツ　ブラシ
霧吹き　雑巾】

③　作品を机に伏せて置く。

④　霧吹きで水をかける。手の空いている人で鳥の子紙（表側）にのりを塗る。

⑤　余分な水分を取る（手ぬぐいを丸めて転がします)。

⑥　のりを塗った鳥の子紙を伏せて作品にかぶせる。かぶせる際にブラシでなでつけながら行う。

⑦　墨が多くのっている部分は避けるように裏から軽く叩く。

⑧　作品と重ならないように鳥の子紙の端にのりを塗ります。

⑨　机からはがして、板に表向きにして貼り付けます。

⑩　机を拭きます。適当にやると、先の作品の墨やのりが次の人の作品についてしまいます。

以上の行程の後、乾燥させたら、切り離して裏打ちの完成です。

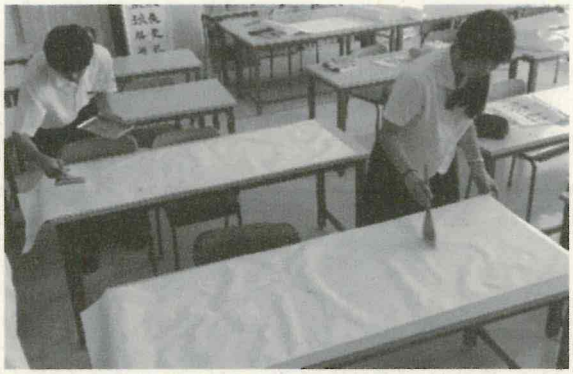
尚、上記の方法は、筆者が学生時代、大学書道部に伝わっていた方法である。
表具師の方に伺ったところ、しっかり乾燥させていない作品を長時間水につけるのは散る（墨がにじみ出してくる）可能性が高いので、気をつけてやらないといけないとのことだった。しかしながら、自らの経験から、道具の準備・費用の面で検討がつくため、この方法での実施とした。また、大学生にも同様に裏打ちを体験させている。

(2) 授業の様子と注意させた点

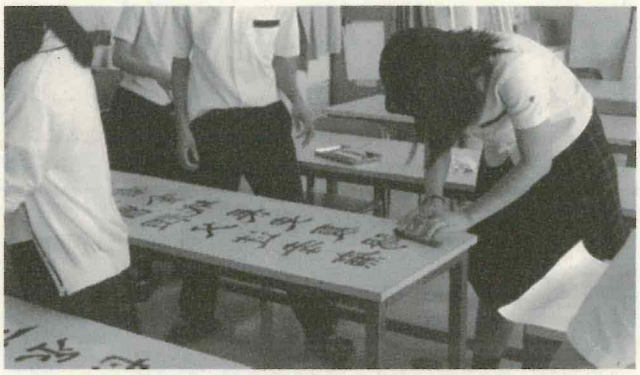
実際の軸を見て、どのように作られているのかを説明し、インターネット上にある画像を利用して、様々な軸装の種類を見せた。その後、本職の表具師の方が作業する様子を動画で見せた後、(1) の手順を説明しながら教員が実際に半切 1/2 の作品を裏打してみせた。

次に、グループ内で作業を分担して、裏打を行わせた。(1) 手順の④から生徒が作業している部分である。

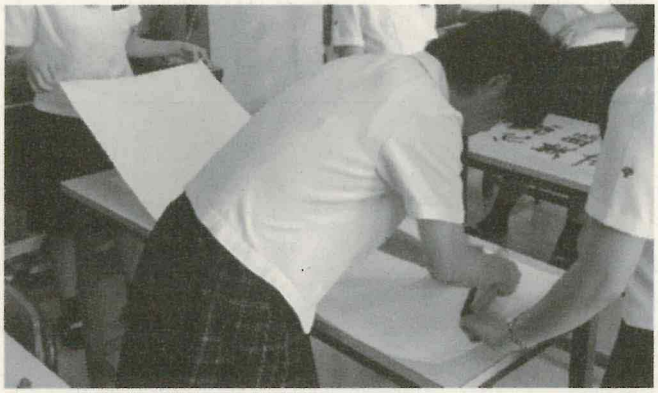
作業分担としては、霧吹きで作品を湿らせ、余分な水気を取るグループと、裏打用の鳥の子紙に糊を塗って準備をするグループに分かれて作業することになる。



↑写真３　のりの塗布



↑写真４　水抜き



←写真５　裏打

作業において、他人の動きに注意することが重要となる。息を合わせなければ作品を破損してしまう恐れがある。また、ぶつかったり、のりをこぼしたりすることが考えられるためである。

さらに、丁寧に作業を行うことを徹底した。のりを塗るにしても、むらがないように塗ることや、水気を抜いた後、作品の周囲の水滴等をきちんと拭き取ることなど、作品作りの一部であることを意識させた。手順⑨もかなり重要で、のりがきちんとついていれば、乾燥するに従い、紙がピンと張っていく（写真６）が、のりが弱く、板から剥がれてくると、写真７のように曲がってしわが入ってしまう。

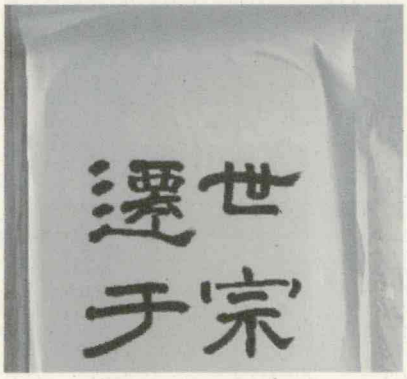


写真６　成功例

写真７　失敗例

尚、板張りをせずに乾かすと写真８のようになる。反り上がってしまい、まっすぐにならなくなった状態を横から撮影したものである。

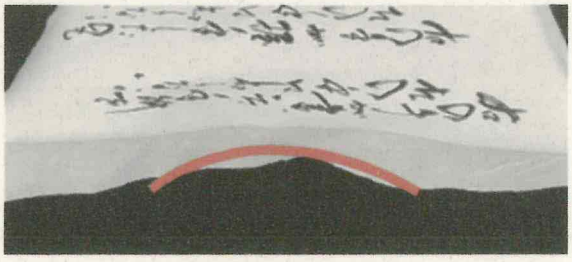


写真８

大学生には半紙で裏打を行わせ、２人１組での作業を指示した（写真９、10、11）。

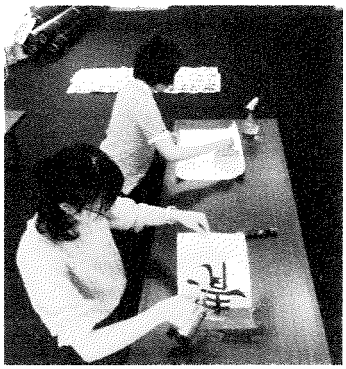


写真９　霧吹き

写真 10　水抜き

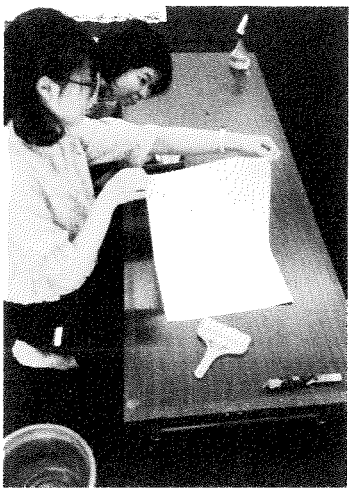


写真 11

大学生の感想を見ても、表装することで、鑑賞するための作品となり、現在の我々が実際に見ることができる作品となるためにも、安定した保存のためにも重要な役割があることを体感することができたようである。

6. まとめ

今回の授業を通しての感想として、「作品として完成したように思えた。」だったり、真っ直ぐになっていく様子を「不思議に思った。」や、「きちんとした作品になった。」というものが出た。さらに、「次に見るときは、もっとしっかり見てみたい。」という意見もあった。また、作業を実際にやってみて、「他人の作品をやる時は緊張した。」とか、「せっかくだから失敗しないようにやりたい。」など、作業に対しても真剣に取り組む様子が見られた。早くやること以上に、丁寧に正確に作業することの重要性を伝えることができたのではないだろうか。また、書道の作品は、多くの場合が表具店に依頼してしまうため、どのような作業が為され、我々が普段鑑賞する軸や作品となっているかを知らずにいる。しかし、体験したことで、その工程や工夫にも目が行くようになる。書という芸術を様々な観点から楽しめれば、より生徒達が興味を持ってくれるであろうと考える。

7. おわりに

今後の授業に向けて、多人数で授業を行う場合（50 分計画）の作業を考えてみたので、以下に掲載しておく。

本講座においては、書道Ⅱの授業で実施したため、書道選択者のみの７名と少数で行っている。今後は書道Ⅰへとその可能性を広げていくためにも、簡易で準備の手間も少なく、多人数で同時に実施する方法へと改変していく必要がある。そこで、以下のように、より簡易に行う方法を考え、計画を立てた。

全３時間で授業を計画

目標：半紙 1/2 の作品を作成し、裏打、色画用紙への貼付けまで行う

目的：裏打ち作業の体験及び、作品の装飾までを自らの手で行うことで、制作や鑑賞への興味関心を深める。

第１時

半紙 1/2 作品制作（どのような作品でも可）

第２時

前時の作品の裏打

第３時

作品の切りはがし、色画用紙への貼付け等

第２時詳細

10分　目的・道具の説明、手順の書かれたプリントの説明

（作品（半紙 1/2）制作及び作業グループは前時で作成のこと）

5分　実演もしくは動画

10分　準備（道具※のセッティングをする）

15分　作業→板へ張り付け

5分　片付け

5分　まとめ・感想記入

必要な道具

２人で１つ：薄めたのり（紙コップ小、デンプンのりで可）、不織布（両面で行う）、
ぞうきん、ケント紙×３（水用・のり用・作品伸ばし用）

８人で１つ：霧吹き

１人で１つ：作品、障子紙を切ったもの

皆で　　：パネル（作品を張り伸ばすためのもの）

※水のりは服につくと、非常にとりにくく、お湯で溶かしてとらなければならないため、汚れても構わない服装で行うことが望ましい。

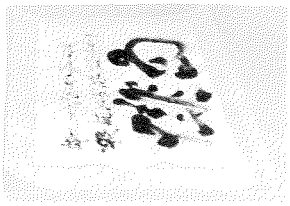
※「不織布」については、ラッピング用のものをロールで購入すると任意のサイズに切って利用できる。

※「薄めたのり」は、指で触って、多少のぬめりを感じる程度の薄さであるため、かなり水が多いと感じる。板に貼る時は、少し濃い目ののりを用意する。

・作業手順詳細

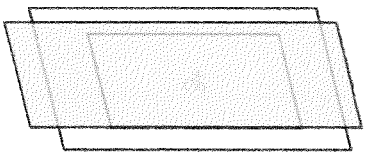
① 不織布を敷く。

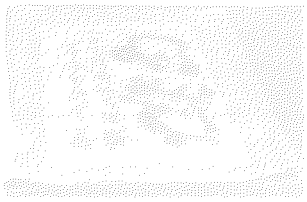
② 不織布の上に作品を裏向きにして重ねる。



③ 霧吹きをして湿らせる（全体に吹く）

④ 裏打用の障子紙を、のりを塗る面を表にして重ねる。

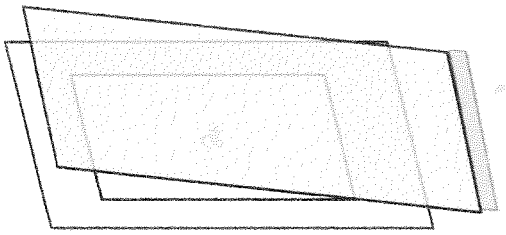




⑤　霧吹きをして、ケント紙(1)で撫でて、全体に水気を与える。

⑥　紙コップののりを少しずつ垂らしながら、ケント紙(2)でまんべんなくのりを塗る。

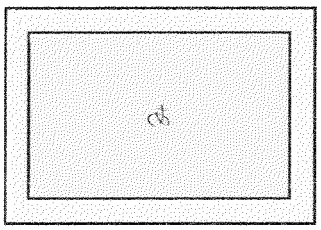
⑦　障子紙を表裏反転させ、端の部分を机に貼付ける。



のりで机に貼付けてある

⑧　裏面から、ケント紙(3)でなでつけ、皺を伸ばしながら、裏打をする。

⑨　不織布を剥がし、作品と重ならないよう周囲（ドット部分）にのりを塗り、板に貼付ける。



実際に、上記の方法にて裏打を行ってみたところ、準備した状態から開始して３分で裏打ちが完成した。書道部生徒に協力してもらい、試したところ、やはり５分程度で完成することができた。

今後は、拓本の採り方も授業として行い、法帖や刻石への興味関心を高められるよう授業を構想していきたいと考えている。

参考文献

高等学校学習指導要領　文部科学省　平成 30 年３月

高等学校学習指導要領解説　芸術（音楽，美術，工芸，書道）編　文部科学省　平成 30 年７月

『増補版　誰れでもできる　裏打のすすめ』藪田夏秋　日貿出版社　2004.3.1 増補版発行